

# 農村の家庭生活

## 農 村 幼 兒 の 保 育 (三)

根 岸 草 笛

### (三) 農村の家庭生活

農地解放で昔のように農家の貧富の差は少なくなりましただけれど、家庭内にはまだ雑草のように根強く封建的な思想がはびこつています。例えて見ますと、家族の日常の食事や入浴の順序なども、家長を中心に厳然と定つていて、嫁や子供の地位が最も低く、家長の先きに嫁や子供の御飯を盛つたり、小姑の先きに入浴したりしたら大変なことになります。又、囲炉裏をかこんで一家団欒するような場合でも、各々の坐る所が一定していてみだりに乱すことが許されません。

先ず庭に向つた座をヨコザといひまして(各地でいろいろと異つた呼び名がありますが)家長の席に決定して、その座は来客特にお坊さんや目上の賓客以外はめつたに譲ることなく、たとえ野良仕事や寄り合いなどで家長が留守でもそこは冒し難い席になつています。ヨコザの向いはキジリといつて薪をくべる所で、一番下の座の下つばの座る所、即ち嫁子供使用人共の座になつています。ヨコザの右或いは左がキヤクザでお客さまの座席と掣或いは男の座とされ、その向いの奥を背に

した座がカカザであつて、主婦(姑)の座になつていますが、杓子渡し(主婦権の相統)のすまぬ嫁はまだその座に座ることができません。

そして姑の権利が非常に絶大であるために、新憲法下でも嫁の人権が無視されていることは昔とたいした変りがありません。朝早くから薄暮の頃まで家事と雑用に追われた上に、野面において男子と同様に仿いて、休息の暇はほとんどありません。しかも、その雑用や炊事の仕方なども、都市のようにガスや水道がなく、うす暗くだつ

広い台所に、水、薪、野菜、調味料、鍋釜などが雑然と離れ離れにおいてあるために、非効率も甚だしいものである。その非効率な加減を或る学者の方が調べられていましたが、それに依りますと、男の人達がまだノウノウと寢床の中で朝寝をしている間に、農家の主婦が歩く距離を計算して見ましたら、平均して期起きて台所へ行くまでに七米、御不浄まで十三米、薪小屋へ十七米、馬小屋へ飼料を運んで十四米というように合計三キロも余計に歩いていることが解りました。そしてその計算で行きますと、一年間に凡そ千九百五十キロの距離を歩き、三十年間農村の主婦を勤めると、大体三万二千八百五十キロを歩きますから、丁度地球を二周するほど、男子より多く歩くかんにようになつてゐるそうです。

それでも普通の新嫁のうちはまだしもですが、子供が生れたら更に苦勞が増します。夜は夜とて授乳やおしめとりかえに熟睡ができず、昼は昼とて

男子衆や手伝いの者がこびり（小屋、おやつ）や昼休みで休息をしている時にも、授乳、洗濯、ほしものなどと身体をやすめることができませぬ。しかも昼間に自分の子供に時間通りの授乳のできる母親はまだ幸のある方でして、子守役の姑に子供を奪れている嫁は、少し田畝が家から離れていると、その往復の時間を目にあげられて、昼間の授乳を断念させられてゐる者があります。そしてありあまる乳を持ち乍ら、姑のつくりあたえる怪しげなこしらえ乳（主として米の粉を与えています）で、我が子の瘦せ細つて行く姿を、涙を抑えて眺めている母があるかと思えば、又、その反対に過勞のために乳の分泌が減つても、毎日自家の鶏が百二百と卵を産んでいながらもそれを自分で喰べることができず、野菜も上等の物はみな市場に出してその残り屑しか喰べることの許されぬ嫁もおります。

それで農村の子供達が無心にさりげ

なく歌つてゐる手鞠歌や追羽根の歌などをきいていまして

ごごぢや、ごごぢや、何故髪結わぬ  
櫛がないかや 鏡がないか

櫛や鏡は沢山あれど

ととさま死なれて三吉や江戸へ  
何をたのしに髪結わりぞ、髪結わり  
ぞとか

.....  
壘三枚 ごご三枚

あわせて六枚ひきつけて

嫁とつてえその嫁は

しくらしくらと泣きまする

何が不足でなきまする

.....  
というように女の生活の悲しさやかなさが歌われているもの多いのも哀れな感じがいたします。

しかしこれはヨメサの地位が低いのであつて、いわゆるカカサ即ち主婦（姑）ともなれば、都市の主婦が一般的に良人の勤勞に依存して、消費生活の面におき主婦の勞働が行われている

のに対し、農村では女の手をとり去つたら農業は成立しないほどに重要な働きをして、現に戦争の最中は女子ばかりで立派に田畠や山林を護り抜いた実例が沢山あります。それで直接出産に参与している女の立場が家庭内においては都市の主婦ほど低いものではなくなります。ですから農村では、早く主婦にならなくては損だということになります。

その外に農村の家庭生活の特色としては迷信の横行などもあげられましようが、あまり永くありませんのでその事は省略させていただきますが、そのためにどれほど多くの人命が失われているか解りません。

けれども農村の家庭生活にも明るくたのしい面も又あります。

農繁期の子供達は垢とボロの塊のような感じで顔もようは洗つて貰えず、衾あしもうすよごれ、手足の爪は狼の子、髪の毛は河童の子、お眼々はぶくろの子、お鼻は豚の子、エトセトラエ

トセトラ……で、乳児もおしめなど一日中とり替えて貰えず、小さな乳倉の中へ押し込められて糞尿の拷問責めですけれど、お祭り、節句、旗日紋日、などの子供達、殊に冬籠りの頃の子供達には行き届いた母親の手と愛情が感じられ、お盆やお正月が来れば、あたまの毛もキレイに整えられて、サツパリした着物に着替えさせて貰えますが、特にその中でもお正月には、甘たれ子羽織の紐に鈴をつけたり、腰に縫いぐるみの千匹猿をブラさけて貰つたりして精々可愛がつて貰えます。そして父親か母親の手製の藁靴に派手な併や縞のへりとりをつけて貰つたものを穿いて、隣り近所へ遊びに廻り、干柿やかち栗を貰つて喰べ歩いてる頃の子供達はやはり幸福という点で都市の幼児にも劣らぬことでしよう。そして年寄りのベバサから「わしらがヨメサにきた頃はのう、褌の幅がこんげに一寸中もあるような振袖を着て、馬の背中に横向きに乗せられてのう、大きな

島田の髷をおもたげにゆられゆらせ、あの峠を越えて来たもんだえい」というような昔話をきく頃が一番たのしいらしいとございます。

#### (四) 農村保育の目標

新潟県の金谷村字飯の部落では、本年の七月から字立の常設保育所を開設いたしました。誰がそのきつかけをつくつたか、という問に対して、それは野面に佇いたり、街の市場へ野菜売りにでかけたりする女子衆だといふ答えでした。そして特にその女子衆の中でも、リヤカーの上につんだ野菜籠の中に白菜や南瓜と一緒に我が子を同居させて、雨の日にも炎天の日にも市場通いをせねばならぬ幼児を持つ母親達が、その往復に最近できた街の保育所の様子をかいま見て「俺らが村にも保育所があつたらもう」ということになつて、村の顔役の所へそのお話を持つて行つたのだそうです。

それで先ず村の主立ちの人達が与論

調査をはじめましたところ、中には「この税金攻勢に責められているぜい辛い時代に、保育所などというぜいたくなものはまつびらだ、国家が国費で建ててくれるまで待てば沢山」というような極端な暴論を吐いた人も、家庭に幼児のない人の中に二三あつた由ですが、結果としては設立となり、字のお寺の一隅に手を入れてとりあえず七十余名の幼児（適令者の全部です）を収容することになりました。

そして一度部落立としての決議がされますと、まるで何か憑きものでもしたかのように、異常に近い程の情熱でその建設をはじめました。木材の切り出し、運搬、砂場づくり、ブランコ吊り、危険物の除去などと、各各その能力に応じた働き振りはいささしいものでしたが、中でも胸を打たれましたことは、滝寺という山あいの谷の部落から通つてくる幼児達が、雨や風雪の日に、曲折してつるつる上る粘土の露出して、蛇が池のふちの危い路を通

らずに登園できるようにとの心やりから、約三百米の新路を切り拓いたことでしょう。農村の人達の自己所有の土地に対する愛着はとて強くて、普通でしたならば、十センチか二十センチ位の境界争いでも、血を血で洗うような深刻なものになることがあるほどのので、その感情を乗り越えて文句なしに、この新路をつくつたという事実は、如何にその村人達が一生懸命になつたかという事実の証明になるからであります。そしてその後は、十三名の運営委員が、折り折り協議しては経営を進めておりますが、そこには何ともいえぬたのしい雰囲気があつて、開所式の日には字一番の年寄りのおばあさんが、自家の庭の大木からおちた銀杏の実を赤白に染めてお祝いに贈れば、海軍の復員婦えりの或る次男坊が、唯一つの帰還土産としての財産であつた軍艦の吊り床を、ハンモック代りにと寄贈したり、中学校の女生徒が手製の姐様人形を持つてきてくれたりして、と

てもとても素晴らしい子供達の樂園ができました。のみならずこの飯の部落に刺激された他の部落でも、保育所が欲しいという与論が方方におきて、只今では村内に字経営の三ヶ所の常設ができましたが、来春四月から更に不便な山奥の二ヶ所の部落にも設立し、その五ヶ所を全部村営に切り替えて統制のあるものにするという村会の決議がされるほどになりました。

しかしこのような全村的な運動に、誰がその最初のつけ火をしたかと申しますと、まず役場の厚生係の内田という青年氏が果の比護児童福祉司と心を合わせて、村の母達の会合の度母に児童福祉の問題をとりあげ「都市の幼児が健康で明るくて、文化的な保育施設の中で、教養のある保母の手に依り、たのしい保育や營養の補給を受けているのに、何故農村の幼児だけが放任されて、まむしにかまれたり、あぶに刺され乍ら野天で遊ばなくてはいけないか」と、くりかえしくりかえし説き廻

つて母達の自覚を促された結果なので  
す。そして婦人会などの事業として高  
田市内の優良保育所を見学させ、彼女  
等の目と耳で実際の保育所の価値を認  
識させたその収穫なのであります。で  
すからこれから後の農村保育の目標は  
まず農村の親達の指導に主眼をおい  
て、保育所の教育性を高揚して、その  
必要を自覚させることにあります。

終戦以後あの様に盛だつた季節保育  
所が、すつかり衰微して、官庁の人達  
が如何にその設置を奨励しても、笛吹  
けど踊らずの感がありますのも、要は  
この根本的な指導精神を忘却している  
からであります。文書の勤告や形ば  
かりの物品の寄贈ぐらいで浅はかなつ  
り方をしても、僅かばかりのものでは  
決して昨今の農民は動きません。しか  
もあの戦争の時代と同じように、農繁  
期に於ける労力の調整というような事  
柄を一枚看板にした指導法がとられて  
いる以上は、保育所が町にも村にも失  
業者や労力のダブツている現在の農

村民の魅力となる筈はありません。

それよりも先ず農村保育のセンター  
として、幾つかの優秀なモデル常設保  
育所を設置して、年間を通じてそのよ  
き保育効果の実績を示し、母親達が安  
心して勤勞すると同時に、いとしい我  
が子の心身の成長のめざましさにおど  
ろく、そうした状態に一ヶ村でもなれ  
ば、それに刺激された周囲の村村に  
も、自分の村にも保育所が欲しいとい  
う声が必ず起きて参ります。又、農繁  
期になつて季節保育所が更に必要であ  
るならば、そのセンターとしての常設  
保育所が準備して分園の形式で出張保  
育を行えば、これまでのような粗末な  
託児所ではなくて、少なくとも保育所  
と名付け得る保育をなし得る可能性が  
増してきます。

ですから、その常設保育所が中心に  
なつて、更に絶えざる努力を以つて地  
域社会の指導を継続すれば、限られた  
保育所の幼児のみならず、前述のよう  
に村全体の親達の低く乏しい幼児への

理解の程度も向上し、暗くて封建的迷  
信的な家庭生活も反省されて、明る  
いものに変化させて行けることと思いま  
す。そこで要は、農村保育の目標は先  
ず地域社会の指導と、家庭の両親教育  
からはじめねばならぬこと、それは少  
々廻りくどいようですが、実は目的へ  
の最短距離であり、しかも最も確実な  
路であると信じてやみません。(完)